夏目漱石の胃病とその文学

——修善寺の大患を中心として——

高橋正夫

夏目漱石は終生自らの内部に、まさに痛みとして感受せざるを得なかったその胃部不安の思いを抱きながら、不断に「人生」そのものの本質を凝視しつづけた。そして、その生涯をかけた自照の成果を、その一作一作に、文字通り彫心鏤骨しながら、形象して行ったのである。

漱石は、よく知られているように、明治四十年（一九〇七・四一才）の仲春に、池辺三山（当時の東京朝日新聞主筆）の来訪を受けて、その新聞社への入社を決意する。やがて東京大学・第一高等学校に辞表を提出、それまでの約十五年間の教師生活を一気に擲うった。爾来、彼は少くとも年に一回、毎回百回程度の連続長篇小説を朝日新聞に書く義務を負う、専属作家としての道を歩き始めた。

漱石自身にとって、それはその実生活と藝術にとっての一大転機であったとともに、また自らの内部に深く疼いて止まない、その「死に至る病」に対する、新たにして望みなき宣戦の布告でもなければならなかった。

漱石が、入社後の最初の長篇小説『虞美人草』の発表以来、いわゆる前期三部作、後期三部作と、相次ぐ力作を世に問い続けた、その光り輝く十星霜の文運は、同時にまた、彼自らのその衷なる死病との、涯しない苦闘に明け暮れた、暗然たる病苦の歴運でもなければならなかった。

最晩期の夏目漱石が、自伝的小説『道草』完結後半歳にして、再び起筆したその未完の大作『明暗』を、遂に一八八回を限りとして永久に書き止したまま、五十才を一期に宿痾の胃潰瘍に斃れたと言う事実は、その意味において、真に壮絶にして象徴的な出来事だったのである。

この問題について、特に所謂「修善寺の大患」と、それに呼応する名品『思い出す事など』を中心に、聊か小考を試みたい。

（なほ、此の小論は先の「漱石文学と胃病」〈杏林大学教養紀

要・第十一集・一九九〇年三月〉を、今回構想を新たに、標題を改め隨所に大幅な加除修正を施して、全面的な補整更新を行ったものである。為念付記する。）

（杏林大学）

野口英世の師、渡辺鼎の業績

石原理年

一八九二（明治二）年、火傷後の開指術により野口英世を医に進ませた渡辺鼎については、谷津三雄「ドクトル渡辺鼎について」、友田康雄「会津藩医学史並びに明治以後の医史」でその略歴は紹介されているが、今回、在日中の業績について解明を試みる。

渡辺鼎は、一八五八（安政五）年九月七日、現福島県耶麻郡西会津町野沢に、渡部思斉の長男として生まれた。父は一八二九年野沢に生れた僧で、漢学を良くし寺小屋「研幾党」を開塾、県議会の前身福島県民会議員を勤める等した。鼎は、一八七一年高島易断の創始者、実業家の高島嘉右衛門が、西洋学に基づく人材育成のため、横浜伊勢山下に設立した高島学校に入学、ジョン・バラに英学、モリスに